



こんにちは！お母さん募金 報告レポート vol.1

2013/7

カンボジア 母子保健ボランティアの育成

■支援地域

カンボジア コンポントム州
 バライサントック保健行政区内にある
 4つの保健センターが管轄する55村

■実施期間

2011年～

■母子保健ボランティア育成人数

55村で84名

※こんにちは！お母さん募金の使途となっていたカンボジアの助産師育成トレーニングが2013年の4月に終了したため上記の活動に変更となりました。

■母子保健ボランティア育成の背景

妊産婦死亡率の高いカンボジアの農村部で、村人が中心になって衛生管理を含めた母子保健面でのケアができるような仕組みを目指し母子健康改善活動をしています。

この活動の中でカギを握る女性が母子保健ボランティアです。母子保健ボランティアは、とくに医療面での資格をもっておらず一般の人に最も近い立場で、保健センターと連携して村の妊産婦/新生児宅を戸別訪問し、日常のケアをアドバイスしたり、保健センターでのサービス利用を働きかけるといった活動を行います。PHJでは村人から選ばれた従来からの保健ボランティアや顔役となっているお母さんなど地元の人材を、母子保健ボランティアとして育成します。



トレーニング終了後の母子保健ボランティアさん

■進捗状況

母子保健ボランティアは昨年30名育成し、現在もフォローアップを続けています。また、今年は新たに54名の母子保健ボランティアを村から選出し、保健知識を習得するためトレーニングを受けさせました。トレーニング終了後は実践編として村の女性一人ひとりを戸別訪問します。戸別訪問で的確に教育が伝えられているか、といったフォローアップも行っています。

■母子保健ボランティアのトレーニングを受けて……

母子保健ボランティアとして健康に関する知識を吸収できたこと。そしてその知識を地域の人と共有できたことがとてもよかったと思います。戸別訪問で村の女性たちは私を信頼し、アドバイスをよく聞いてくれますので、やりがいを感じています。とくに産前産後の女性にさまざまなケアについて話したことで、以前よりもぐっと親しくなり、彼女らの健康についても知ることができるようになりました。



ソムテムさん40歳

■母子保健ボランティアからアドバイスを受けて

母子保健ボランティアの人に出産前のケアについてアドバイスを受けてとても安心しました。たとえば食事のとりかたや鉄分をとることの重要性、危険な兆候、出産の準備などです。また彼女は村の人なので、体に関してトラブルが起きた時も、すぐ近くにいて助けてもらえるからとても安心です。



オウチ・チャントウさん
 27歳
 二人目の子供を妊娠中



こんにちは！お母さん募金 報告レポート vol.1

2013/7

カンボジア 助産師の育成トレーニング

■支援地域

カンボジア プレイヴェン州

■実施期間

2008年から開始

2012年8月からは4人の助産師を教育

2013年4月にて終了しました

(こちらの募金の使途対象期間は2012年8月から)

■対象

カンボジア プレイベン州プレイスダット地区

保健センター助産師

■背景

妊産婦死亡率の高いカンボジアの農村部で、出産の鍵を握る保健センター(診療所)の助産師。しかし内戦などの影響で助産師そのものの数が少ないうえ、資格をもっていても実践的なトレーニングを行っていない場合が多く、信頼性が低いのが現状です。

■主な活動

スキルが足りず村人から信頼を獲得できなかった助産師に対して州立病院で1ヶ月間、スキルアップトレーニングを集中的に行います。

その後地域住民に対して助産師がトレーニングを受けたことをPR。保健センターでの出産を奨励します。助産師のもとの助産数を増やし、安全な出産が増えることを目指します。



トレーニング終了式



プレイベン州 州立病院



病院でのトレーニング



担当地域での指導

■トレーニングを受けて……

助産に必要なスキルや知識の習得はもちろん、場数を踏んだことで母子の扱いに自信が付き、助産数が増えました。村人に頼られることが嬉しいです。

プレイベン州 メボン保健センター
ロン・サベツ助産師



■PHJのトレーニングについて

安全なお産には、助産師の教育が欠かせません。PHJの助産師トレーニングは、研修生/講師比率が高く、充実しています。

プレイベン州 州病院長
コ・サール医師





こんにちは！お母さん募金 報告レポート vol.1 2013/7 インドネシア 母子健康改善教育

■支援地域：インドネシア バンタン州
セララン県 (ジャカルタ西部)

■実施期間：2012年7月から2年

■背景

インドネシアの貧しい村では、保健医療施設が完備されておらず、助産師も常駐していないため、自宅での出産が一般的で、しかも伝統的産婆といった医療知識のない人が介助することがほとんどです。そのため多量出血など万一のトラブルに対応できず出産で命を落とす妊産婦が少なくありません。こうしたことから妊産婦死亡率や乳幼児死亡率が高く課題となっていました。そこで健康教育を通じて母子保健と乳幼児の栄養状況と保健衛生環境を改善するなど、プライマリーヘルスケアの定着と健康教育支援のモデル作りを行っています。

■活動内容

母子健康改善教育の主役は村の保健センターの助産師。担当の村で月ごとのテーマ(保健衛生と栄養)に関してヘルスボランティアを含む村人(女性、妊産婦、男性)に啓蒙教育を行います。

また助産師さんは皆に理解しやすい集合指導教育できるように、国立研修センターで受けられました。またその後はリフレッシュトレーニングを定期的に受けられています。

教育のテーマ

- ・「妊娠体操(腰痛防止や安産のため)」
- ・「妊娠期の栄養について」
- ・「生後6ヶ月は母乳で」

など

■母子健康教育を受けて……

「初めての妊娠の女性：妊娠・出産について不安が多いのですが、この活動に参加すると知識が増え、また他の妊婦さんの経験談も聞けるので安心できます。」

「妊娠中は情緒不安定になりやすいのですが、この活動に参加して助産師さんの話を聞いたり、皆と笑ったりすると気分が明るくなります。」

「長年信じてきたことが、根拠もない「迷信」であることがわかり、驚いています。」

「妊娠中は出不足になりがちなのですが、このような活動があると外出する機会ができ、体調不良など悩んでいたことも、助産師さんの話で安心でき、楽しみにしています。」



■リフレッシュトレーニングを受けて…… 助産師

忘れていた知識などを思い出すことができたり、新しい知識を増やすことができます。また、一緒に仕事をする仲間との研修や勉強会はモチベーションを上げることにもつながります。また、自信をもって母子健康改善教育活動を実施できたり、出産介助することもできるようになりました。助産学校を卒業してしまうと、なかなか研修や勉強会に参加する機会がないので、このような機会があること嬉しく思います。

